

共古日録 田十七

東京市立図書館蔵
山本 康
十思 野
様馬

十四日

海
軍

特別
15
1413
49



を記すべし... 正計全集... 元禄七年四月都撰冊子を
也... 市人... 通風... 享保七年... 難波
也... 都... 春... 幸... 凡... 時... の... 行
也... 禁... 青... 年... 表... 錦... の... 行... 并... 禁...
也... 慶... 妓... 女... の... 表... 紙... の... 組... 此... の... 似... 狂... の... 趣... 向
也... 用... 意... 表... 紙... 上... 包... 一... 心... 彩... 色... を... 始... 絶... せ... ら... 丹... 多...
也... 同... 年... 七... 月... 更... 人... を... 禁... 情... 本... の... 禁... 會... 禁... と... 禁...
也... 止... 書... 肆... 人... 許... 州... 及... 校... 本... と... 及... 收... せ... 一... と... 禁...
也... 後... 之... 亂... 亂... 止... 又... 考... の... 不... 禁... 并... 宗... 教... の...
也... 後... 之... 公... 後... の... 記... 録... を... 記... し... 外... 國... の... 事... 務... と... 記... す... 河... 記... 禁...

女
の
百
の
水

女... の... 百... の... 水... 禁... 會... 禁... と... 禁...
也... 同... 年... 七... 月... 更... 人... を... 禁... 情... 本... の... 禁... 會... 禁... と... 禁...
也... 止... 書... 肆... 人... 許... 州... 及... 校... 本... と... 及... 收... せ... 一... と... 禁...
也... 後... 之... 亂... 亂... 止... 又... 考... の... 不... 禁... 并... 宗... 教... の...
也... 後... 之... 公... 後... の... 記... 録... を... 記... し... 外... 國... の... 事... 務... と... 記... す... 河... 記... 禁...

此の鏡は、
 西蔵の古
 銅色、
 古色可愛
 西蔵所鑄、
 名未詳

西蔵鏡
 獨形

此の銅鏡、
 内田家藏



銅色、
 古色可愛
 西蔵所鑄、
 名未詳

隆明の尾
縁

是れは... 昔は... 予即年の... あり... ぬ... け... 卯... 己... 亥... 未... 酉... 申... 酉... 戌... 亥... 子...
隆明の尾
縁

心も始
の

心も始の... 予即年の... あり... ぬ... け... 卯... 己... 亥... 未... 酉... 申... 酉... 戌... 亥... 子...
心も始の

中
海

子
海

子
海

子
海

研強
過年
乃心
忍苦
...

朱
明
隆
正

隆
正
隆
正

江心川柳をよむ世の精の保あり

知らぬのれあきあき

つまらぬとていふささ

いふ来ぬとていふささ

川柳が道敷の如くはなれど

のにおもひとていふささ

管下の界よりあきて

音の湯車應生東遊以善酒

一場別は借以憐之

歌歌玉堂

南句 草

元々手れせうとう

野津車應生は俗物を清成と

とせし人かき年未の

物日本所かき年未の

とて今もいふ人の

物いふるをいふの

于め文心九年子申春

三園社心カカ

三月三日始九日三井

三月三日始九日三井

- 一、芭蕉筆跡 自畫焚 一
- 一、芭蕉筆跡 六字名号 一
- 一、西山宗因短冊 一
- 一、蕪村短冊 一
- 一、(賀)加千代小色紙 一
- 一、荒木田守武短冊 一
- 一、七世湖十短冊 一
- 一、巽籬斎湖十短冊 一
- 一、半面美人印 其角所用 一
- 一、石川雅望草稿 花見湖 一
- 一、一蝶画 牛若赤慶图 一

- 一、隱元木菴、鉄牛諸禪師像 三幅
- 一、柱杖盃五如意 木菴自畫焚 一
- 一、鉄牛禪師筆跡 歸隱偈 一幅
- 一、高泉國師頌偈 一
- 一、宝船畫 稻葉正則公筆 一
- 一、千秋亭記 鉄牛筆 一
- 一、弘福寺舊伽藍图 一
- 一、大淀三平風筆跡 一卷
- 一、龍瑞石友同石記 鉄牛筆 一
- 一、南山鉄牛禪師持物 數

其他

○第四會場(百花園)

- 一、太田南甫筆跡屏風 半隻
- 一、太田南甫額 花々 一
- 一、鈴木蟬潭画南甫替括图 一幅
- 一、谷文晁戲画箱 四君子 一個
- 一、詩佛筆跡額 一面
- 一、詩佛筆跡簾 春夏秋冬 二面
- 一、蓮田鵬斎筆跡 長堤重云 一幅
- 一、菊塙宛化政名家消息 一卷

秋々七草考

- 都鳥考
- 秋芳園
- 盛音集
- 俳諧墨多川集
- 庭行崎一夜子
- 墨多川一覽图

其他

抱一
詩佛
墨晁

蜀山

春画

其他

一、菖蒲自賛像

一、幅

一、菖蒲像 武清画

一、童二樹墨林

伊藤博之右存

一、卷

一、古今短冊

三、帖

一、版木

里子川遊覧法

群芳曆

春々七草考

○ 追加 (福澤氏印)

一、枝持付楓 樹下の青石

然石の研造り鏡

の梅木 唐楓 四用木 幼木 花

葉、砂、のぼり、こぼり

亦、ふり、のぼり、こぼり

研造り 大原三郎 四月二十日

植木や平紙

脇紙 作り紙

文芸年表 (長らく)

向山が下福の文

將軍

の歌

唐楓乃

葉

の枝持りの

楓とて樹

大いなる

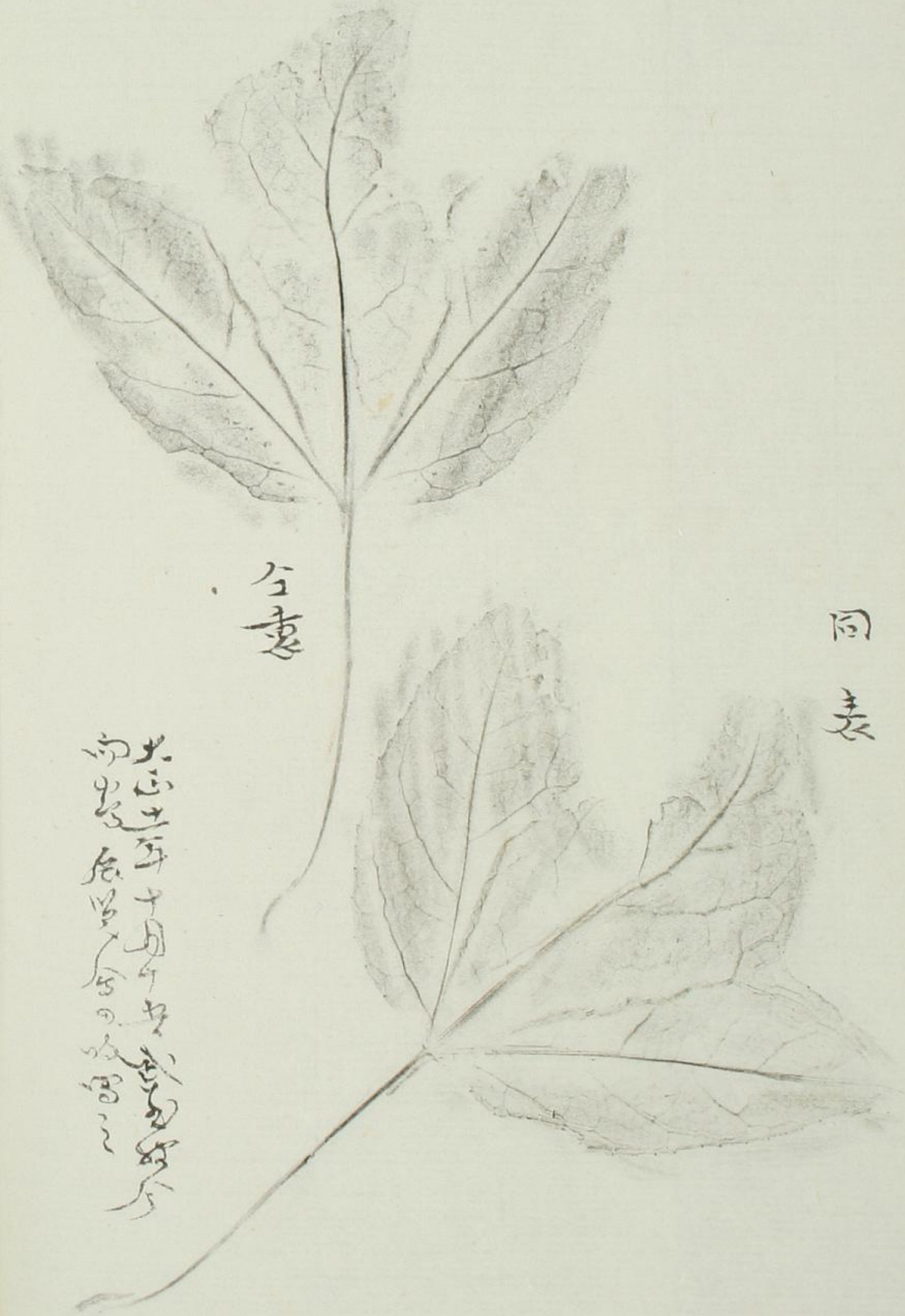
洞とて

樹の皮目青し



葉の表を
裏を

同表



左表

此は正徳十一年十月廿七日
於中野屋敷に採りしものなり

牛の角の形に似たるものなり
正徳十一年十月廿七日

本所中野屋敷
横川中野屋敷
九月廿七日

三圍其角堂庭に枚研断片あり半多々種子多々
花紙一ツこれ道邊のところにありたに八月○右に正安三年
とあり又承仁七年二月とあり
七字題目の名は古くは延元元年
孔福寺に録牛の角の母十有七箇あり書りしとあり
巻あり交交の格も黄赤なる血を染みしとあり
三村女清氏に納りしとあり

Handwritten text in cursive Japanese calligraphy (sōsho) on the left page. The text is densely packed and flows across the page in approximately 15 horizontal lines. The characters are fluid and interconnected, characteristic of the sōsho style.

Handwritten text in cursive Japanese calligraphy (sōsho) on the right page. The text is arranged in approximately 15 horizontal lines. In the lower right quadrant, there is a small, dark ink drawing of a hand or a similar anatomical form, with several small characters written around it. The overall style is consistent with the text on the left page.

行蔵上人道歌行

行蔵上人の道歌

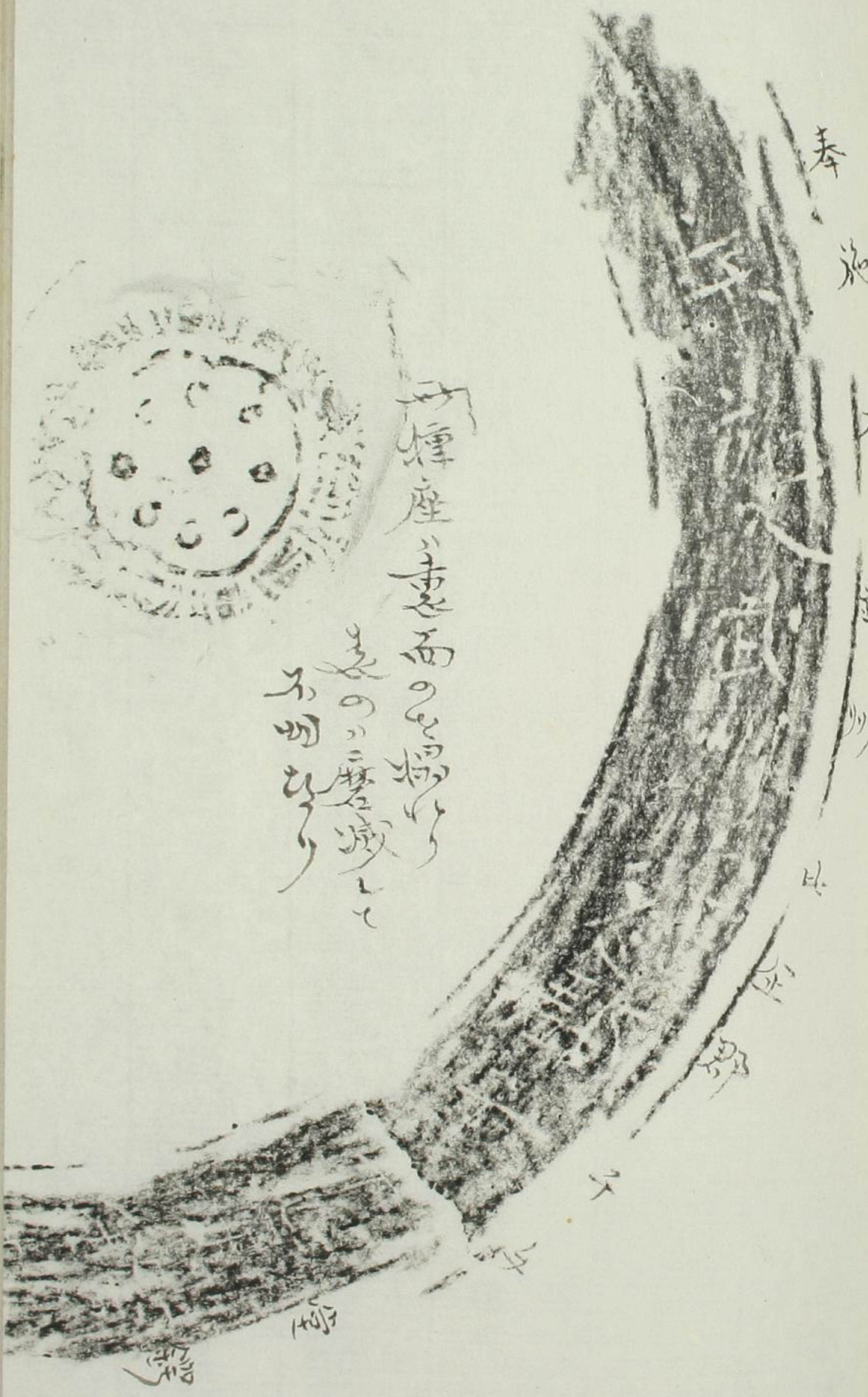
其の初めに云く... 行蔵上人の道歌

大乗の道歌
持好の道歌
瑞雲の道歌

其の初めに云く... 行蔵上人の道歌
其の次に云く... 行蔵上人の道歌
其の次に云く... 行蔵上人の道歌

大乗の道歌
持好の道歌
瑞雲の道歌

其の初めに云く... 行蔵上人の道歌
其の次に云く... 行蔵上人の道歌
其の次に云く... 行蔵上人の道歌



奉
池

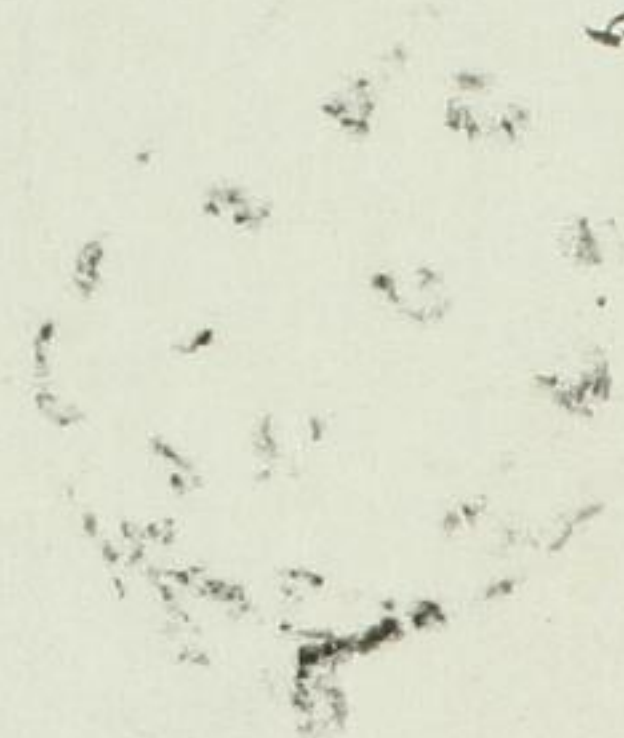
神座の裏面の
美の三層に
不明なり

此の古物なり
前の方物なり
大伴古色
細く如す
明るに見
ぬるもの
たぬ



多岐の
の
見
の
一
の

二半



線六



寬

正

二年

己

巳

十

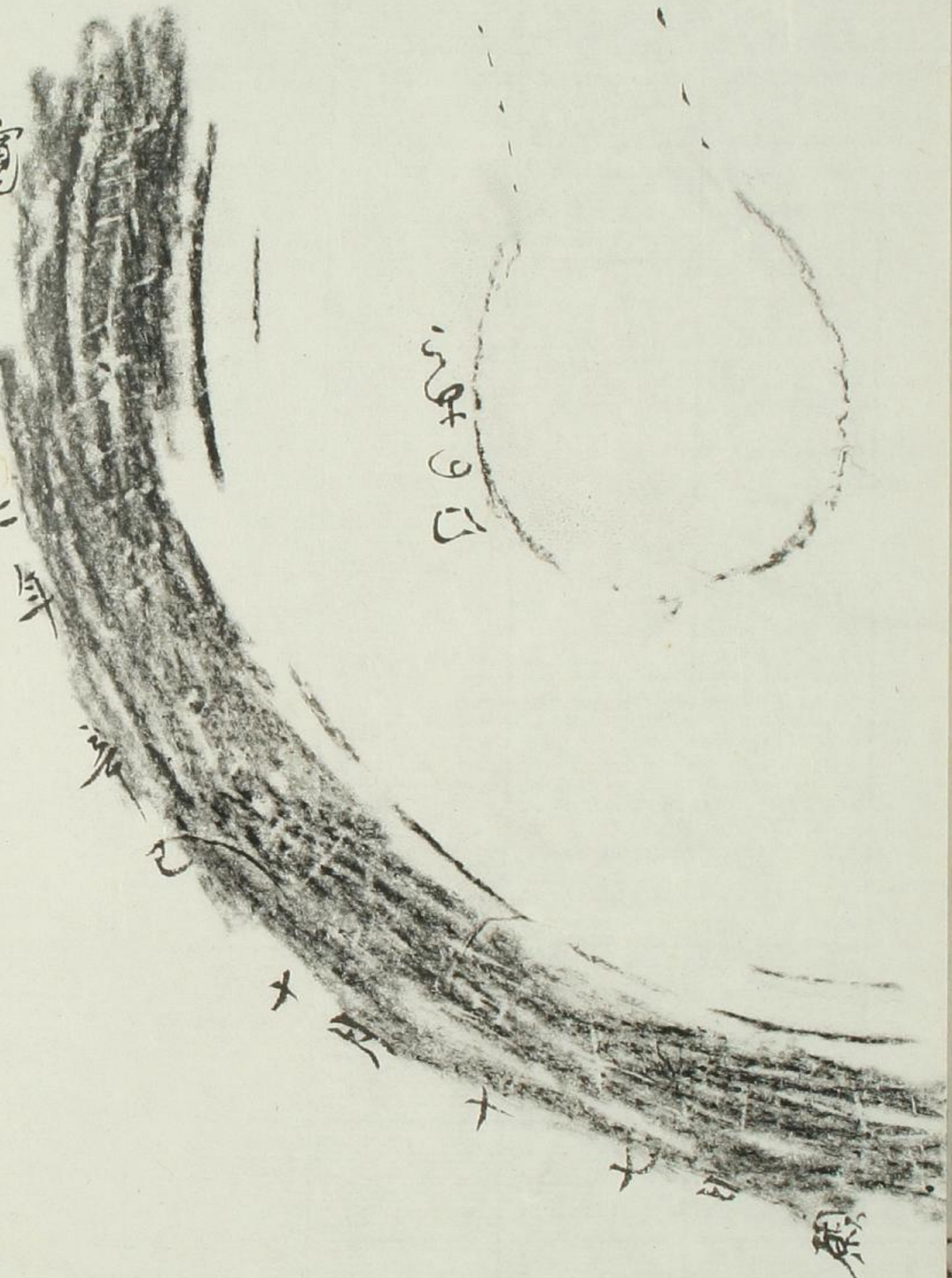
五

十

十

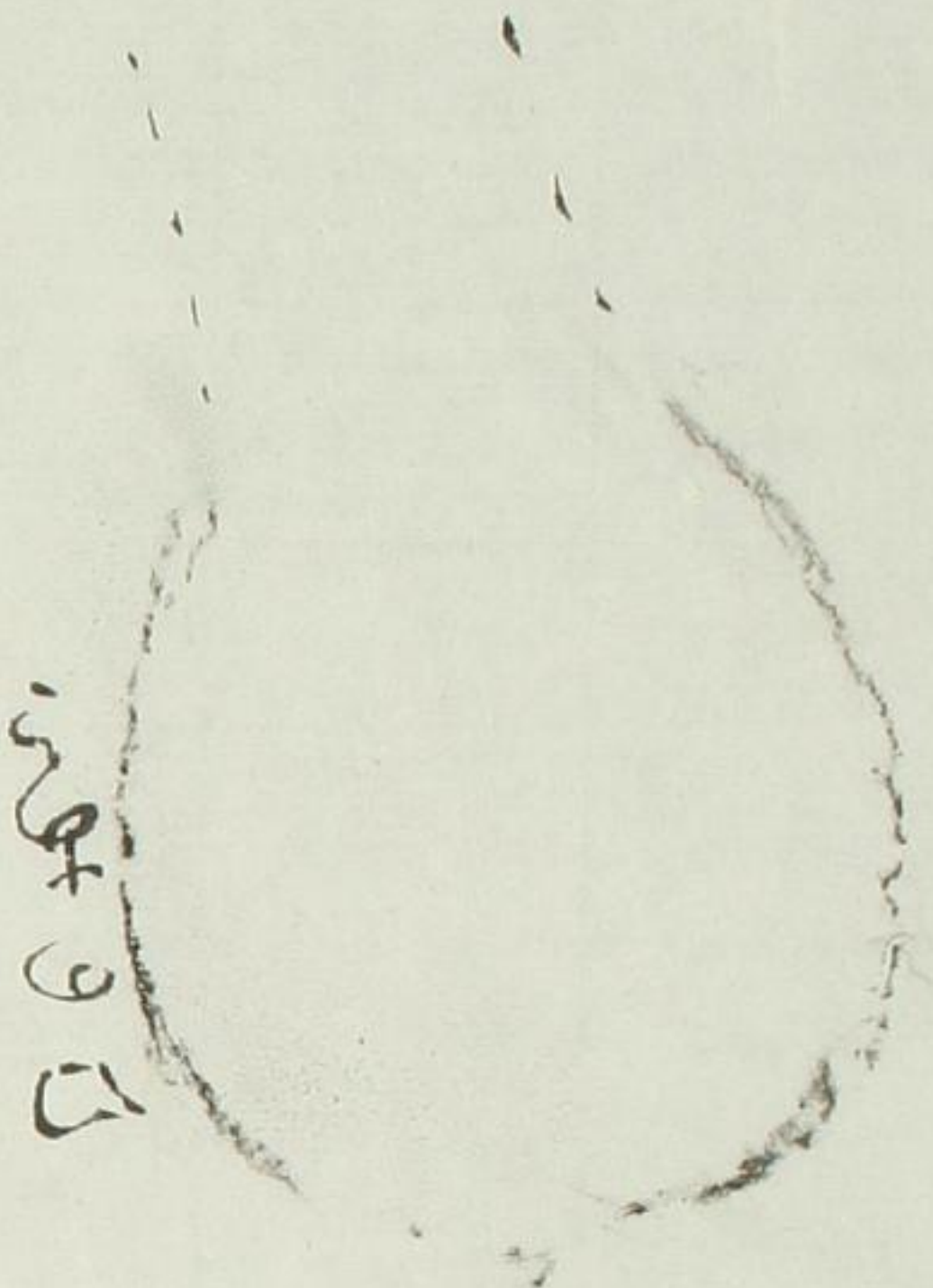
日

原



三

九



初堂の残り石に燈る道とて彫り火の夜研あり年々
 ありとこけを思ひたりはる橋本はひびき火木の
 孝白大樹あり樹影あり日本武蔵の
 松との研あり女をてりてりてりてりてりてり
 研をてりてりてりてりてりてりてりてりてり
 くれよりいそいで火木林とてりてりてりてり
 け上よりいそいで火木林とてりてりてりてり
 ありよりいそいで火木林とてりてりてりてり
 むいよりいそいで火木林とてりてりてりてり
 笠を水に女をてりてりてりてりてりてり
 長を水に女をてりてりてりてりてりてり
 るればあり

橋本を眼考のありありにあり石谷とてり

為



ぶずせすに物のは必ずしも干せと申との事であらう
其れは鳥は明日天氣の好む所に必ずしも鳴らざる
る申す

フークロー ノリツケ ホーホー

本邦地方

「フークロー」とは鳥の女房で「あはれ」の音なり
あすは天気だから「あはれ」を着物に糊を付けて干せと申す
とのことあり申す

又リツケホーホー

船名

重理

(初)ホーホー(と啼く)と(トレスケホーホー)

中村

この啼き聲を真似て買物すると其人が死ぬといふ
あつて(或)馬鹿(が)啼き買物して死ぬといふ
あつて(或)妻も(身)も(家)の(惣)ぢい(ホーホー)と
申す

ニツケホーホー

上野國

多野郡

凡呂敷大根と向の大根引の頃に啼く

ノリツケホーホー

前橋

ゴキチホーテフ

ヤダモテ

下野國

宇都宮

ノリツケホーホー

美濃國

糊付け干せ」と向こえ中山に鳥が啼けば次は天氣が好む

ホワスケホーホー

ホロスケホーホー

常陸國

水戸

ツルツトホーコウ

南

のづつ春公にして身を染むる意にて入るるを向くと申す
ズルツトホーコウ

上野國

山形

スルツト ホーコー

ボロキテ ホーコー

グルツト ホーコー

テイスケ ダイコラ ブツザイタ

夏 大鼓を ち製た

ノリツケ ホーホー

ボロスケ ホーコー

ホーホー ホーホー

コードラ フロシキダイコー ゴマミソデモエーゾー

白菊を「コードラ」と申す

ゴロスケ ゴーゴー 夕ガアケタラスラツクロ 神奈川近方

花が咲きたら 葉を造らう

九十九里近方

下總國常陸郡近方

武蔵國川越近方

赤嶽山

八王子近方

武蔵

ホーボー コロスケ

ゴロツチ ホーコー

一般「クロウ」と云はす「ゴロツチ」ゴロツチと申す

ゴロツチヨ ホコシヨ

ゴロスケ ホーホー

鳥を申すは「鳥」ゴロスケと云ふは「鳥」

ゴロスケ ホーコシヨ ホーホト

ゴロスケとは鳥の異名に云

ゴロスケホコセ

極く強調に云

コロスケ ドラシタ ホーホー

鳥を申すは「鳥」と云ふは「鳥」一般の鳥と云ふは

甲斐國

楊樹野近方

駿河國

藤枝近方

遠江國

金谷近方

〃

中野近方

三河國

デンスケ デンスケ ヨーセイ

エーッレデヤ
連れ行く
ツレテク
ツレテク
怒連ぢや
尾張國東春日郡南部

鳥の翼を徳ゆきしはく思を好むを

とく事らして思を思慕す惟一のものを

ホロスケ ヨーセイ

伊勢國 桑名也

ゴロツキ ヨーセイ

鳥が啼けは雨になつてとく事は双方共一致りたる

士族也で啼くのは文武中如平樂翁婦が真白河から

桑名(國語)を来ると一時に其徳を慕ふを来た

鳥であつて白河也で啼くのがホロスケ ヨーセイ

で郷里の

え来ちつのはゴロツキ ヨーセイ

かとも思はれ

ますか

歳せられ鳥の上下の別がある

ついで

の

の

の

の

の

ノリツケ ヨーセイ

ノリツケ ヨーセイ

ノリツケ ヨーセイ

ノリツケ ヨーセイ

ノリツケ ヨーセイ

ノリツケ ヨーセイ

ヨヘイ

クルット

カエセイ

ノリツケ ヨーセイ

ノリツケ ヨーセイ

ノリツケ ヨーセイ

ノリツケ ヨーセイ

ノリツケ ヨーセイ

ノリツケ ヨーセイ

ノリツケ ホーセー ノリスルケ

大和國

ヨヘイ コロツト (轉) コケー

河内國

フルーツクノコ ノリラー スリオケ

紀伊國 有田郡中郡

カ、ノリスリ ヲケ

和歌山也 熊野也

フルツク ヲーフー

播磨國

ホーホー フラツクホーホー 幼時祖母から聞かれたのが夕景のは「コヨロ(夕暮)モラツテ

子ココロセで夜明前のは「ノリツクホーホー」である湯

ホーホー ゴロスケホーホー

備前國 田中

と再び鳴くを「と鳴く」を「ゴロスケホーホー」と

トーヒテ トーゴイ 田山人には斯う云ふ由

バーバー ゴロツト ホシタカ

備後國

ボロキテ ホーコー 異なる フルツクと申す

安藝國 廣島

フルツク トーゴイ ボロキテ トーコウ のつぎの夜啼するの「フルツク」がまたと云ふ

直に啼を止む鳥を「フルツク」と云ふなり

フルツク フーフー ヨガアケタラ スラツクロー 長門國 丹波國

ゴロキ

ゴロキ

カセイ

武身七つとよの道の人を裁かす鳥の羽を喰ひ
 しを来たが物なるをキーンと説く聲をきき
 立ててあ眼をぬきまはるの生きた蛙を刺し
 ぬきぬきの今一は薫の鳥をたしむる時
 きてんやじたよ時寝りしと子ら娘の未
 戒りて鳥の羽をぬきまはるの生きた蛙を
 と思ふは雨後年々羽の色を立と頂にあつと
 キーンとキーンと音くと共に鳥が之を相呼ぶ
 はサラツクザラザラと音となきは
 ドツクオウヤン
 円橋国 鳥取也云
 圓青也云
 ノリツクオウヤン
 ドツクオウヤン

コロクトホーヤン ホーヤン
 コロクトホーヤン
 羽の色をぬきまはるの生きた蛙を刺し
 の色をぬきまはるの生きた蛙を刺し
 ち長い
 コロクトホーヤン ホーヤン
 故に鳥をぬきまはるの生きた蛙を刺し
 コロクトホーヤン
 ノリツクホーヤン
 ホロキテホーヤン
 ノリツクホーヤン
 トシヨリゴト
 雨天

東伯郡也云
 伯耆國 御米屋也云
 出雲國
 河波國
 伊豫國
 松江也云
 徳島也云
 比山也云

フルツク フーファー
必に鳥をフルツクと云ふ

土佐國

フルツク デシコシ コヒトリ 同 高知地方

(鳥) (男子越し) (見一人) ちり
フルツクフー (雄の方) フルツクフーシ (雌の方)?

コーゾー カヤクソクラーカ
今は兎も角も昔は久る米の鳥は雄にしかく啼きた
トツコ トートー (おこ) ハヤクソ クワシヨ

コーゾー カヤクソクラーカー 豊後國 曾東部?

ウーウー グラウーグラウー コーコー グルグルウーグルウー
なを種々して犬を呼ぶ聲か人の死ぬるのなき聲やを教

フウキテ フウフウ 同 西國東部

ツウシテ ツウキイ 同 文殊山をなつる鳥國東部

コーズー カヤクソ ツー 日田地方

コーズー ココツト ホーセー

啼聲二様者ココツトホーセー (干せ) と啼く鳥の習
は必晴天と申す(鳥中)

ツーコテ ツークエー 同 遠見那中山也

是は疾くして疾く来いの意味に有コト

ココココ

と啼くをあれは犬を啼と申して人の死ぬ前兆と申す

カ子ツケドーコ カ子ツケドーコゾー 肥前國唐津郡

鳥を捕り又ドーコドリと啼び 晩啼げ晴天未明
啼げは雨天と云ふ

コーゾーコノツキヤドーカハ
蓋し子の増は月はどまかの義なる解に可き或者の
知る金貨に産を造りて返さず金貨自其に出世け
今月にはドウズとる増に産はせり和尚遊に返さず
金貨之を苦に海に死せし其靈自和となりて毎
孝に来りて産はするとなり

コーゾーカレクサクカハ
昔し孝院の馬の比身したると申すは増と馬の
奇意あり

カ子スケドローコー
西彼井那の二部

コーゾーコーゾーカレクソ
クワンキヤ肥後國築本也

鳥をの増鳥と申す

「コーズーコーズー」と初め長く啼き増として聲高く

カレクソ クレキヤ

夕に啼くと「雨コーズー」と申す日雨天の兆とて境天に
啼くと「日コーズー」と申す好日和と申す

トク クラウ コノスケトククワウ
薩摩國阿久根也

疾く 癒う 癒う 幸之ゆ疾 癒う
急うは命令言なり能く氣速なる土俗の感化を言け居る
鳥を「トククワウ鳥」と申す

ヨスケ ヨスケ コスケ ヨスケ
長島也

鳥を與ゆると申す

染各必方の鳥轉聲

雲雀

テンサスクモ テンサスクモ 数回も繰り返すのは天に昇るとい

(天に雲を造る)

ト行モ

ヤザカサ

ト行モ

ヤザカサ

これは下りて

啼鳴

(鳴鳴不やらの音)

コートレ メートレ ミチートレ 磐城國直理町

七分七分七分 (舞のめ)

美濃國

月二朱 月二朱 月二朱 (舞のめ)

早九ノ餅々餅々 (七、四、九日の(舞) 餅とく意はなり) 常陸國常陸

頬白

羽前國瀧田

新慶起るて 味當すれ

一筆 終二仕小

一分二朱 負けた

一筆 終二仕小 勝負を済す人などは 領事 常陸國常陸

一筆 終二仕小

一筆 終二仕小 (寿の初め) 紀伊國有田郡中部

頬赤

一筆 終二仕小 め小

燕

お前不 常陸國 常陸國東伯郡也方

ツチクク

ムシユク

ヲレノクチヤ

ミレービ

(食玉)

(食玉)

(物おのり)

(餅)

ツレサセ

ツレサセ

ヤコサセ

スツトラ

カタツグ

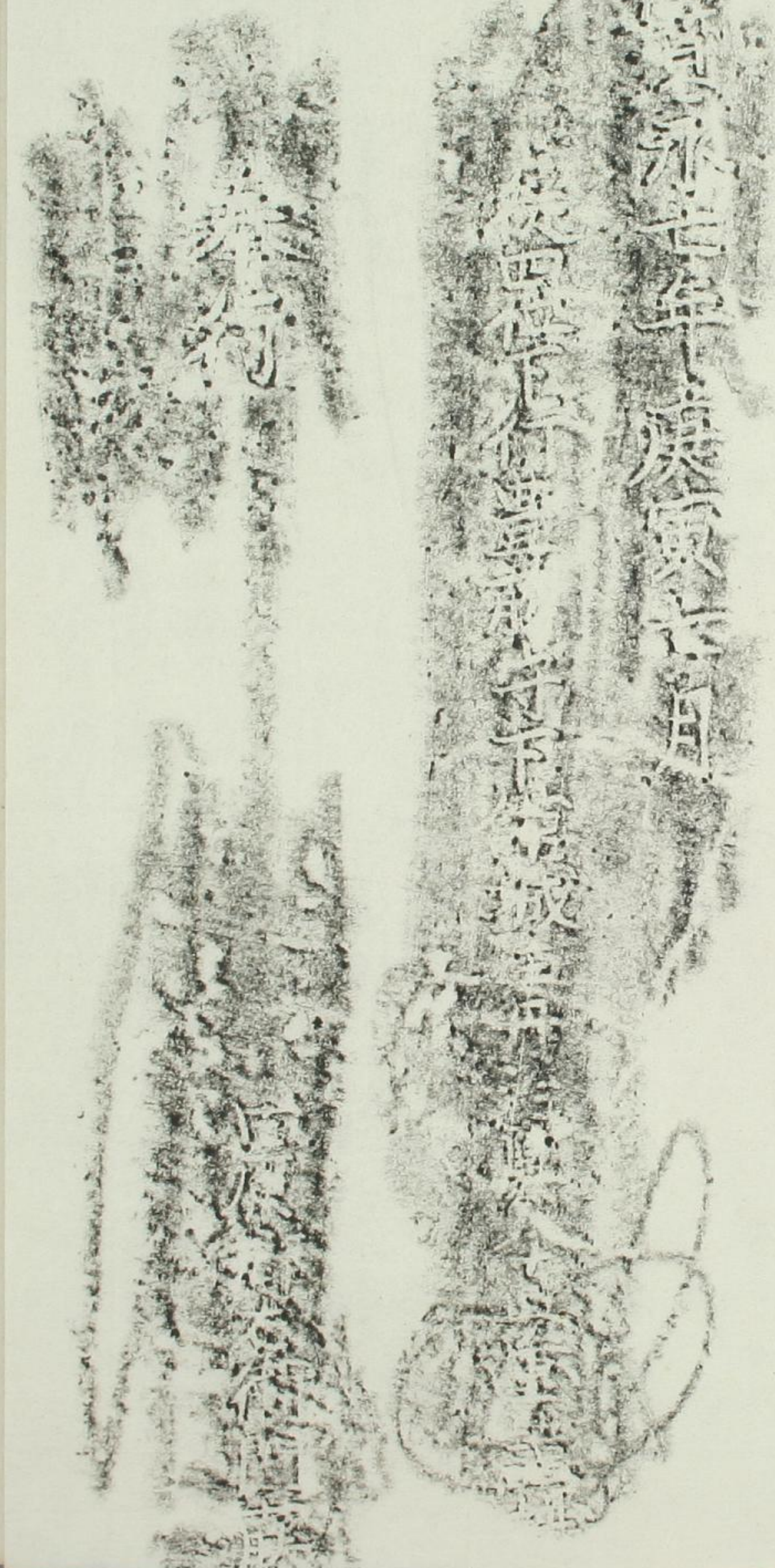
カタテスツグ

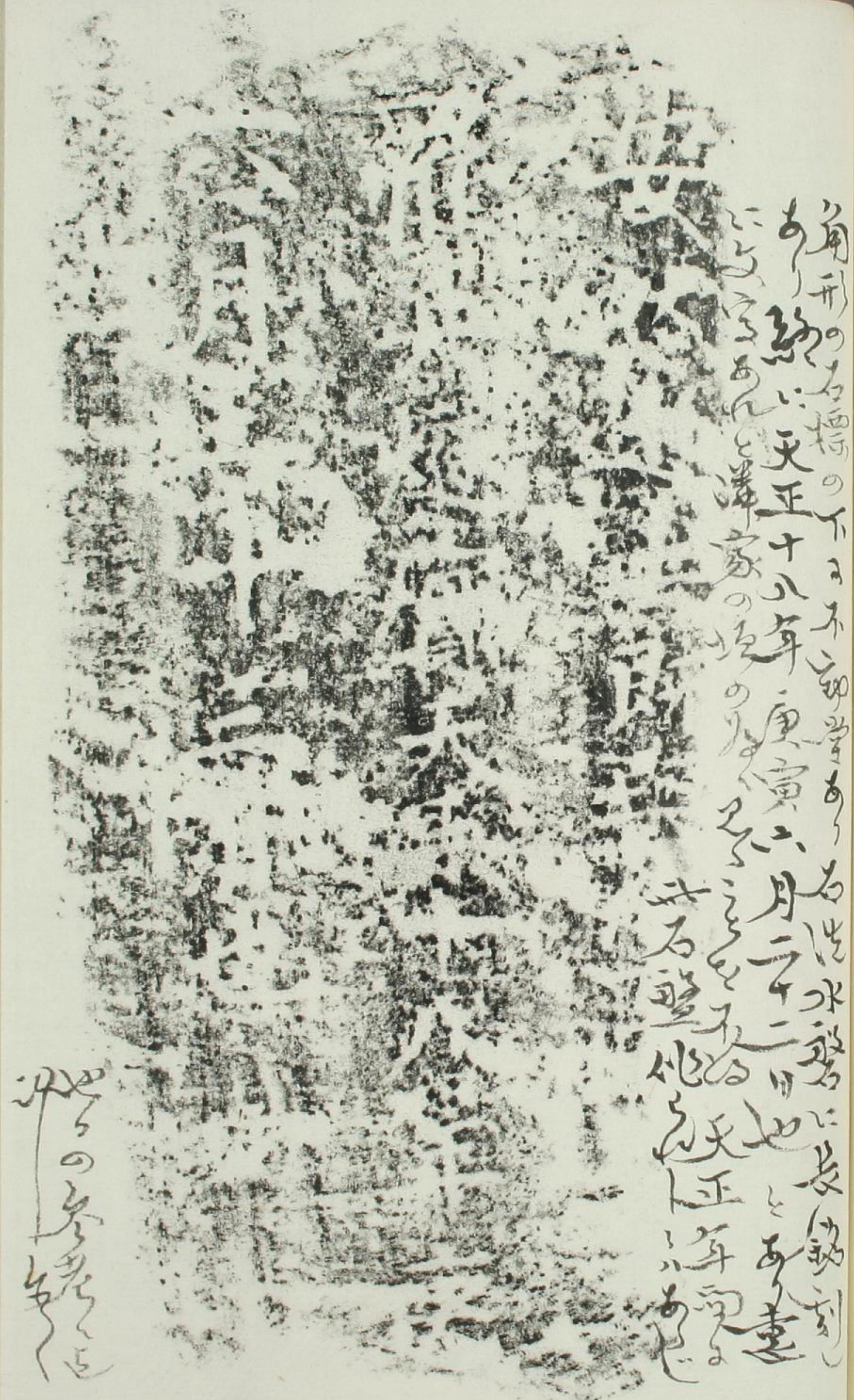
（襷縫）能く縫へ 裾のゆるぎをいかに
縫ひ縫ひのゆるぎをいかに縫ひ縫ひのゆるぎをいかに
縫ひ縫ひのゆるぎをいかに縫ひ縫ひのゆるぎをいかに
縫ひ縫ひのゆるぎをいかに縫ひ縫ひのゆるぎをいかに
縫ひ縫ひのゆるぎをいかに縫ひ縫ひのゆるぎをいかに

（襷縫）能く縫へ 裾のゆるぎをいかに
縫ひ縫ひのゆるぎをいかに縫ひ縫ひのゆるぎをいかに
縫ひ縫ひのゆるぎをいかに縫ひ縫ひのゆるぎをいかに
縫ひ縫ひのゆるぎをいかに縫ひ縫ひのゆるぎをいかに
縫ひ縫ひのゆるぎをいかに縫ひ縫ひのゆるぎをいかに

能く縫へ
能く縫へ

能く縫へ 能く縫へ 能く縫へ 能く縫へ
能く縫へ 能く縫へ 能く縫へ 能く縫へ
能く縫へ 能く縫へ 能く縫へ 能く縫へ
能く縫へ 能く縫へ 能く縫へ 能く縫へ





此の字は

角形の石印の下の不
り物に 天正十八年庚寅六月二十日
とあると澤家の印の
石印は天正十八年
六月二十日

寺の石印の下の不
り物に 天正十八年庚寅六月二十日
とあると澤家の印の
石印は天正十八年
六月二十日



撞座

行堂未用何年知ハル
身熱ニ光言ハズ致シテ
身熱ハ光言ハズ致シテ
神宮未用何年知ハル
行堂未用何年知ハル
身熱ニ光言ハズ致シテ
身熱ハ光言ハズ致シテ
神宮未用何年知ハル
行堂未用何年知ハル

堤讚波様
弘化二年三月
東院人丸中様

用何年
丸中様
御用何年

赤田の
入

二年
赤田の
入
二年
赤田の
入
二年
赤田の
入
二年
赤田の
入

千社 意江可外 文定 二册 五十一日 文定 清の
 浪華 十二月 書 簿 一 七百八十八文 中
 親古 教帖 一 十五白 三
 撥多 録興 一 十三白 林 其 中
 和歌 百首 一 七白 六 林
 和歌 百首 一 七白 六 林
 理言 録興 三 九白 六 其
 朝陽 問答 簿 六 七白 三 六 其
 三格 阿蘇 興 二冊 二冊 二冊 二冊 二冊 二冊
 今昔 考より 増え 各 二冊 二冊 二冊 二冊 二冊
 画帖 二冊 二冊 二冊 二冊 二冊 二冊

三十三
 三十三
 三十三
 三十三

獨りの物も本にたのまあり
 吉野 昌 一 十三白 中
 成茂 野 一 十三白 中
 河堂 文 一 十三白 中
 高好 其 一 十三白 中
 九月 數 一 十三白 中

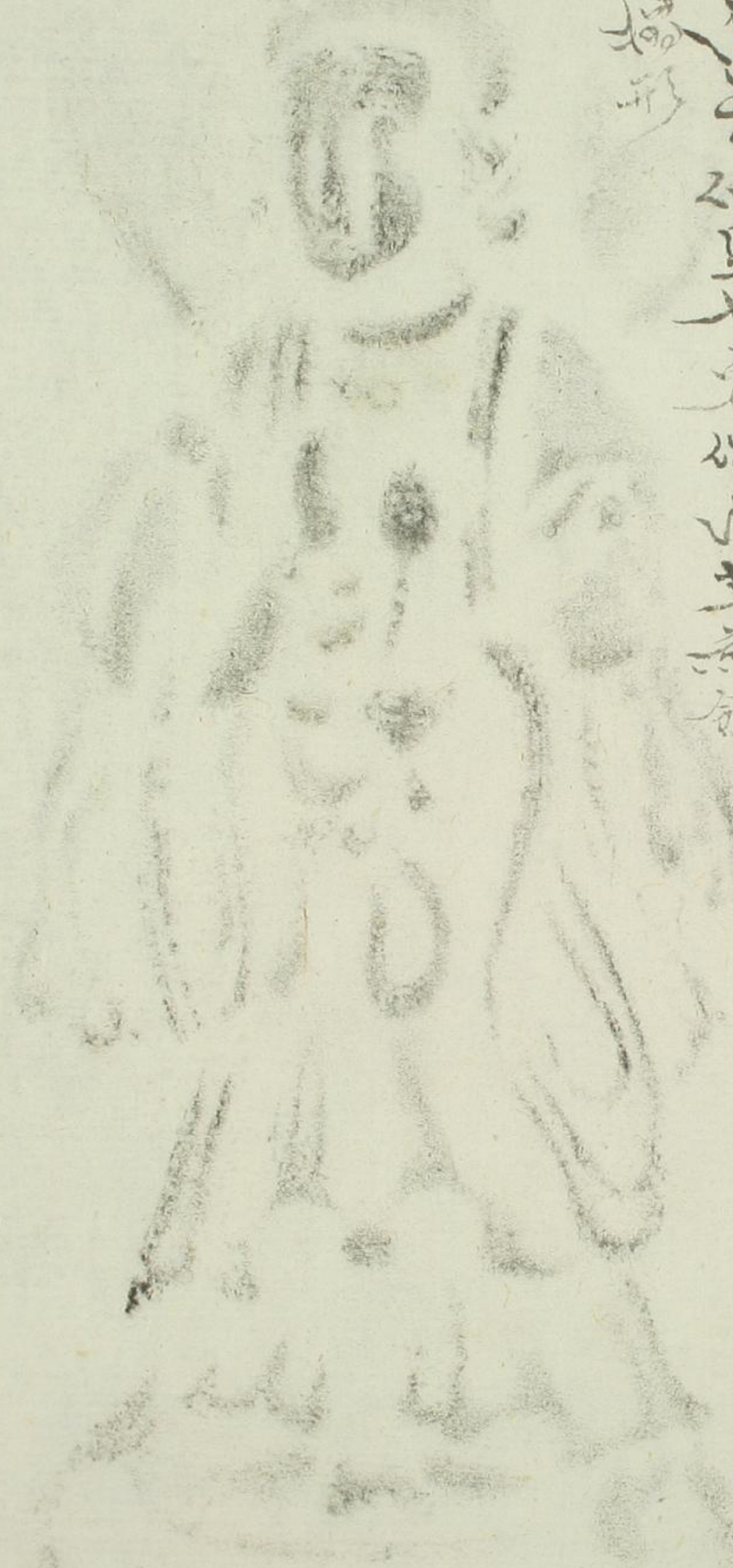
さくら又さくら
さくら又さくら
さくら又さくら

さくら又さくら
のまはとふの
さくら又さくら
さくら又さくら
さくら又さくら
さくら又さくら
さくら又さくら
さくら又さくら
さくら又さくら
さくら又さくら

さくら又さくら
さくら又さくら
さくら又さくら



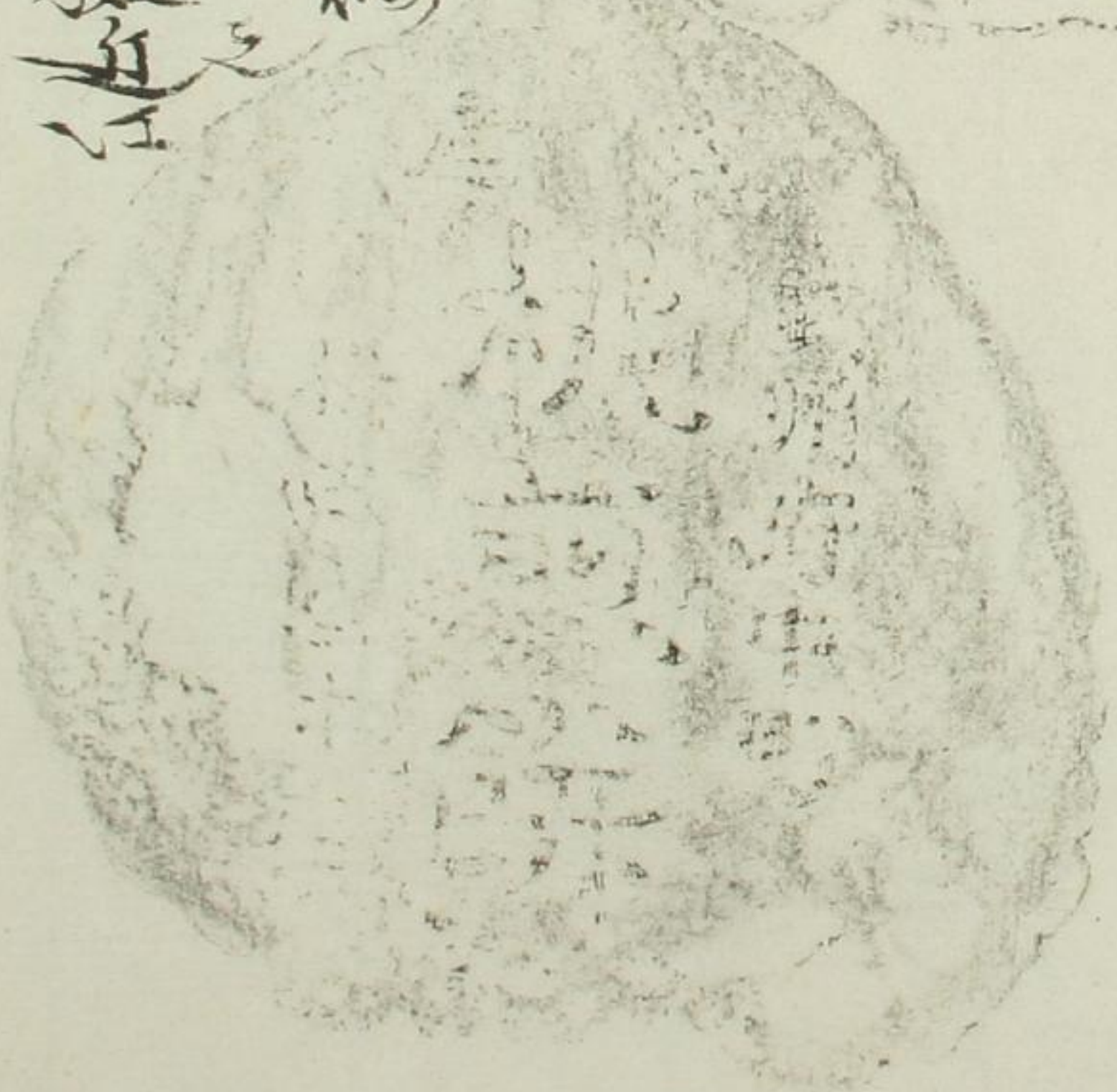
さくら又さくら
さくら又さくら
さくら又さくら



日意而東に於て草堂謹記とあり

菱餅の揚形の皮を茶敷の中に入れて焼く
 せんべい状のものをたまたま桃の皮を焼く
 せんべい状のものをたまたま桃の皮を焼く

せんべい
 菱餅の
 名詞も
 古くより
 あつたり
 和名は
 菱餅 揚子
 漢語は 菱餅
 以由 菱餅の皮を焼く
 雍州府志に 菱餅製三枚 謂之 菱餅
 菱餅 菱餅 仙袂 又 斯 菱餅 井
 人家 亦 菱餅 亦 菱餅 亦 菱餅



持乳の形天の
釜の法

國解井三製者也然其餅然其外麤而膨脹所以鬼
形面故或謂鬼者餅之形也
足薪の物に二編織成其葉を左の邊せ丸く餅く
の然ちかちかきをかちかく昔の餅の者故の餅は
しとあり

持乳の形天の餅の形に似たり餅の形に似たり

天照大御宮
聖天宮

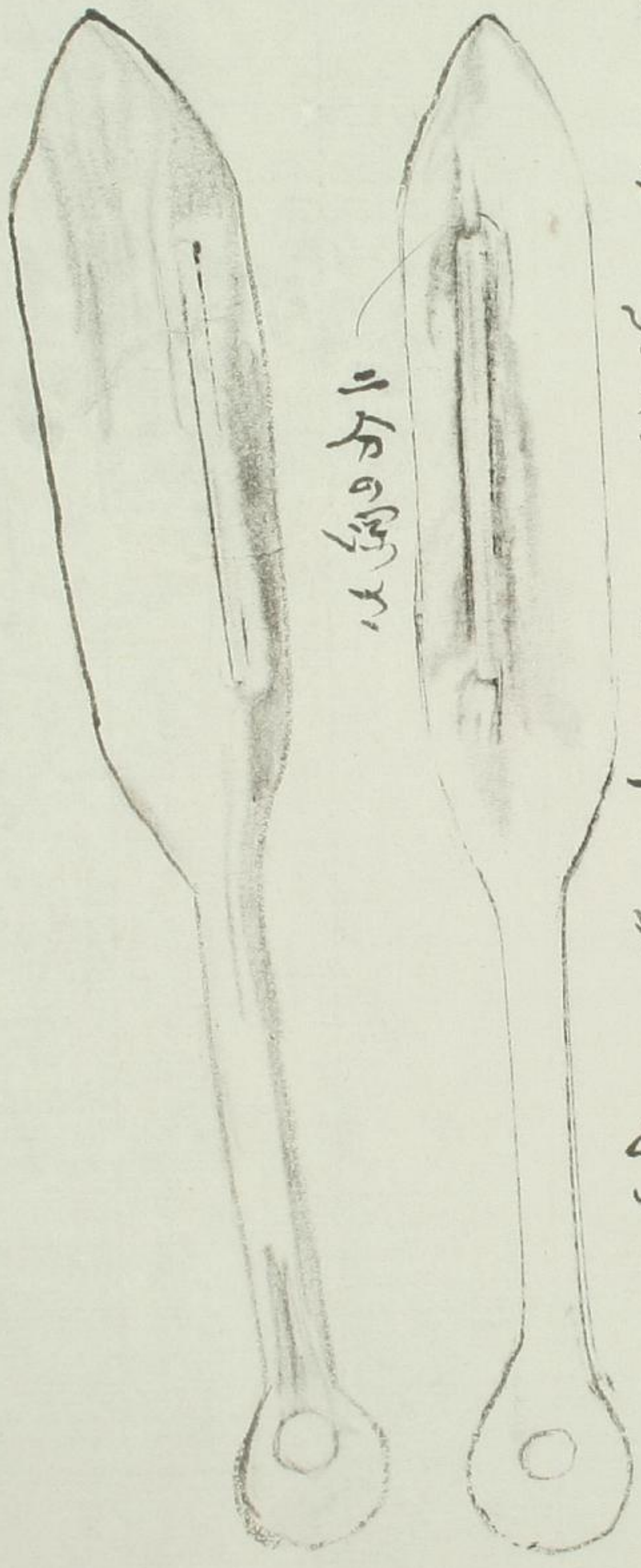
火之神樂
御釜一鳥取
蘇州縣島取
仁ら法草任

と刻し人名ありて實に昔を成すなり古神ありて日の神
おし火之神樂の火の神を祀り聖天宮の三つに刻しせん用せ

皮むき

大正十一年七月四日のころに世に傳へて御釜の形に似たり
とてこのおの形製りてのをも書しん

二つの餅



この餅を焼く女提平の形に似たり
と引くは皮のあけし名は餅の形に似たり
とてこの餅の形

此尾尾
と尾尾

と云ふことあり又其後其の心を
その中に二狸の遊臺を設けて人の履き
登るに取懸せんと為れり此の包然り
又其其れ人と尊しきことあり本朝倉鑑十
二冬一或入山家坐野也人眼向火乘暖而居
遊臺者唐長四五尺動魚兒女而延之此言也
深川大工の本姓寺のりまの清遊の傍に其れを建てし
と云ふ所の名は尾尾の尾尾の尾尾は其れを
海歌を云ふ子ハコノ歌なり張師正の唐政録に漢
以宮殿多魚形者言天上有魚尾字言為其象冠
屋以覆之唐以来寺觀殿宇尚有為魚形尾指

上者不知何時易名曰尾尾一もた蘇氏遊義に言は
海歌なる漢武柏梁殿を作らざるあり水の特なる能火
字を都く因に其多を上に置て今これを尾尾と云
非なり
鬼尾はさきで古は思ふこと遠く九日あり
の鬼尾と云ふこの見日所の高如中將の二近ありて見
たることあり
この見受たる
此の尾尾の天授字祿の身証ありとありと因を
ゆのたまり
一真檀那吉田源藏人頼方三男
源金毘羅丸
(奥面)
天授二戊午季春日造
一八二〇年
一八二〇年
一八二〇年

電車
戒
都

てし天徳二年
此れ如と
電車の
電車
電車

電車
電車
電車

電車
電車
電車

電車
電車
電車

電車
電車
電車

電車
電車
電車

電車
電車
電車

電車
電車
電車



共古日録 四十七 目五十一

Handwritten calligraphy in cursive script (草書) covering the envelope, including the name 松林 (Sōrin) and other characters.

Red rectangular seal impression with the characters 川上松林 (Kawajima Sōrin).



Red circular seal impression, possibly a personal or studio seal.

Printed address in vertical Japanese characters: 松林松林 (Sōrin Sōrin) and 日本郵政 (Nippon Yūsei).